

戦後社会運動のなかのベ平連 : ベ平連運動の地域的 展開を中心に

平井, 一臣
鹿児島大学法文学部

<https://doi.org/10.15017/3933>

出版情報 : 法政研究. 71 (4), pp. 355-387, 2005-03-09. 九州大学法政学会
バージョン :
権利関係 :

戦後社会運動のなかのべ平連

―べ平連運動の地域的展開を中心に―^①

平井一臣

はじめに

一 べ平連運動の時期区分

二 べ平連運動の登場と地域

三 急進化と地域べ平連の急増

四 運動の沈静化と地域課題

五 べ平連の解散

むすび

はじめに

ヴェトナム戦争は、とくに一九六五年二月のアメリカによる北爆開始以降、日本にも大きな影響を与えた。しばしば指摘されるように、政治面では日米安保条約に基づく対米協力の強化、経済面ではヴェトナム特需による高度経済成長の持続、そして、当時アメリカの支配下に置かれていた沖縄では、米軍基地がフル稼働し、また米軍による犯罪やトラブルなども多発していた。こうした政治、経済両面での影響を受けるなか、社会運動においては、ヴェトナム反戦運動が一定の盛り上がりを見せ、それは一九六〇年代後半の日本社会の有り様にも影響を与えた。

六〇年代後半の日本の社会運動は、歴史的には一九六〇年安保闘争における大衆運動の波が引いたあとに再び起こった大衆運動であり、ヴェトナム戦争はその引き金になった。⁽²⁾しかし、岸内閣による強硬な国会運営に対する危機感をバネとし、民主主義擁護をスローガンとした六〇年安保闘争とは異なり、戦後民主主義に対する懐疑や批判を伴う運動が六〇年代後半の社会運動であった。それまでの日本の社会運動の流れを一定程度引き継ぎながらも、従来にはない主張やスローガンも登場した。また、世界的には、先進資本主義諸国における「若者の反乱」のなかで盛り上がった運動でもあり、世界史的な共時性を有した運動であった。⁽³⁾さらに付け加えると、歴史学研究会二〇〇二年度大会の「一九六八年」をテーマとしたセッションで荒川章二が指摘しているように、一九六〇年代後半の社会運動は、革新自治体、地域住民運動、沖縄の復帰闘争など、多様な課題を掲げ多様な担い手が進めた社会運動が重層的に展開された点に特徴があった。⁽⁴⁾

六〇年代後半の日本の社会運動は、従来の社会運動との連続と非連続、世界史的な共時性、日本国内の社会運動の重層的展開、という三つの視点から捉えなおすことが不可欠である。本稿で取り上げるベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）⁽⁵⁾は、六〇年代後半の日本の社会運動を考察する際に無視することができない運動である。⁽⁶⁾すなわち、ベ平連の運

動の担い手には、六〇年安保闘争やその他の社会運動の経験者と、ベ平連への参加により初めて社会運動を経験した者、すなわち社会運動への新規参入者が含まれ、戦後日本の社会運動との連続と非連続の両面を備えた運動であった。また、ベ平連の運動の参加者の多くは当時の若者だった。⁷さらに、アメリカの新聞に意見広告を掲載したりアメリカの反戦活動家を招いた講演会やシンポジウムを開催するなど、また、アメリカ軍脱走兵の支援活動を行うなど、⁸ベ平連の運動は国際的な反戦平和運動とのつながりをもった運動でもあった。そして、ベ平連の運動は、「中心なき運動体」であったために、ベ平連の運動内部に多様な課題と担い手を抱えた重層性をもった運動でもあった。

なお、ベ平連については、これまでにも研究がなされてきており、また、ベ平連関係者による回想録なども出版され、運動の概要やイデオロギーについて、ある程度のことばは明らかになっている。⁹ただ、これまでの研究は、基本的には東京を中心としたベ平連の運動に焦点が当てられており、また、小田実や鶴見俊輔など、ベ平連の運動に積極的に関わった知識人層の思想と行動からベ平連の運動を評価するという傾向が強かったと言えるだろう。¹⁰ベ平連の運動における東京のベ平連が果たした役割の大きさや、積極的にかかわった知識人層の役割を否定するわけではない。しかし、ベ平連の運動は全国各地で展開された運動であり、と同時に、ベ平連の運動は東京を頂点とする中央集権的な運動ではなかったことからすれば、東京以外の地域で展開されたベ平連運動を視野にいれた運動全体の動向を検証する必要があると思われる。

以上のような理由から、本稿では、ベ平連運動を地域的展開という視点から検討して、この運動が戦後日本の社会運動のなかでもった歴史的意味をさぐってみたい。その場合、とくに注目したいのは二つの点である。一つは、ベ平連運動の推移のなかで運動の当事者たちによって地域ベ平連の運動はどのように位置づけられていたのかという問題、もう一つは、実際に地域ベ平連の運動はどのようなものだったのかという問題、この二つである。言い換えれば「ベ平連運動のなかの地域」という問題と「地域のなかのベ平連運動」という二つの問題に光を当ててみたいということである。

なお、本論に入る前に、資料的な問題について付言しておきたい。ベ平連関係の資料は、この間いくつか出版もされているが、地域ベ平連に関する資料は、それほど多くはない。筆者は、埼玉大学の共生社会研究センターに所蔵されている吉川勇一氏の資料（以下、「吉川資料」と略記する）を利用したが、そこにはニュースやチラシなどの地域ベ平連の動向を知る上で貴重な資料が含まれている。しかし、当時のベ平連関係の資料全体からすれば、吉川資料もまた断片的なものにすぎない。今後、六〇年代後半の社会運動についての地域レベルでの資料をかなり意識的に収集保存していくことを考える必要があるのではないかと、本稿を準備して痛感した次第である。⁽¹²⁾

一 ベ平連運動の時期区分

ベ平連の運動は、東京のベ平連に関して言えば、一九六五年四月の最初のデモから、一九七四年一月の解散までの約九年間にわたって展開された。この間に地域のベ平連がいくつできたのか、正確な数字を把握することは困難である。

一つの手がかりは、旧ベ平連のホームページにアップされている地域ベ平連のリストであるが、これによれば、現在（二〇〇四年七月時点）確認されているベ平連組織は日本全国で三八〇あるようだ。⁽¹³⁾

これらの多くの地域レベルでの運動を視野に入れて、⁽¹⁴⁾この九年間の運動を四つの時期に区分してみたい。第一の時期は一九六五年から六七年末までの時期で、ベ平連の運動が登場し、地域のなかからそれに呼応する動きが始まる時期。第二の時期は六七年末から六九年までで、ベ平連の運動がヴェトナム反戦から「変革」という問題に運動の課題を移行させ、また、いわゆる地域ベ平連が急増した時期にあたる。第三の時期は、七〇年から七一年までで、運動が次第に沈静化し、地域ベ平連の活動のあり方をめぐって方向性が模索される時期。そして第四の時期は一九七二年以降のベ平連の解散に向けての議論が始まり実際に解散に至る時期である。以上の四つの時期区分にしたがって、ベ平連運動のなか

で運動の当事者たちは地域をどのように考えていたのか、そして各時期において地域のベ平連はどのような動きを示したのかということ明らかにしてみたい。

ただ、この時期区分はあくまでもひとつの目安であるということをおきたい。ベ平連の運動は中央集権的な運動組織ではなかったゆえに、地域のベ平連運動の内容や特徴も一様ではなかったし、運動の進展状況も地域によってかなり時間的なズレが存在していた。ここで採用する時期区分は、あくまでも大まかな傾向を把握するためのものにすぎない。

二 ベ平連運動の登場と地域

一九六五年四月二四日にベ平連は最初のデモを行った。そして、九月二五日からは定例デモを開始し、一〇月からは『ベ平連ニュース』を発行するなど、運動は次第に「東京のベ平連運動」から「全国各地のベ平連運動」へと広がっていった。⁽¹⁵⁾ 『ベ平連ニュース』を見ると、地域でのベ平連運動を伝えるニュースが目にとまる。早くも創刊号では京都ベ平連の動向を伝える記事と並んで、長野県のベ平連伊那谷の会の発足を伝える記事がある。⁽¹⁶⁾ 第一五号になると（六六年一二月）、各地のベ平連の動向を伝えるページが設けられ、また、投書欄でも地域でのベ平連組織の発足を伝えるものが散見される。⁽¹⁷⁾

この第一期に発足したベ平連組織あるいはベ平連に類似した組織は、一九六五年五月に発足した京都ベ平連が最も早いものであり、六五年から六六年にかけて発足したものととして札幌ベ平連、仙台市民ベトナム委員会、名古屋ベトナム問題懇談会、浦和市民の会、旭川ベ平連、福岡の十の日デモの会、沖縄ベ平連などがある。地域によって組織の性格には違いがあったと思われるが、多くは東京のベ平連から発せられた運動に呼応する形で始まったという点に特徴がある。

たとえば、意見広告カンパへの呼応や全国講演旅行の受け入れなどが、地域でのベ平連結成に影響を与えたようである。⁽¹⁸⁾ さて、そのような東京のベ平連の動きに呼応する動きがなぜ全国各地で生じたのだろうか。もっとも大きな要因として「戦争の記憶」を指摘することができよう。⁽¹⁹⁾ ベ平連関係者の一人武藤一羊は、初期のベ平連運動の広がりについて「戦争の記憶」は、地域の人々がベ平連をつくる際の一つのバネになった。たとえば、ベ平連通信への初期の投書をまとめた『平和を呼ぶ声』に収められたものの中には、社会人や女性、とくに女性からの投書に戦争体験に触れたものが非常に目につく。たとえば、宮崎市の女性からは「昭和十九年応召したまま遂に生きてかえらなかつた夫。当時生れたばかりだった息子が成人式を迎えました。二十年の年月は長かつたのか短かつたのか、どちらとも言うことが出来ません。(中略)戦争によつてむぎむぎ多くの命が失われ、それにつらなる者の悲しみ、訴えるところのない叫びは、二十年の歳月にうずもれてしまうのでしょうか。」という文章が、また、大阪市の上村ゆみという女性からは「私は現在四十九歳なのですが、どうしても戦争と言うものが頭からはなれないのです。夫と兄を戦死させてしまったのです」という文章が寄せられており、いずれも彼女らの「戦争の記憶」が綴られている。⁽²¹⁾

また、ベ平連運動の運動スタイルに共鳴した部分もあつたようである。たとえば、長野県のベ平連伊那谷の会の関係者は『『ベ平連』の運動だつたら素直にやってみよう』という文章が寄せられており、いづれも彼女らがかけています」というように、運動スタイルへの共感を表明していた。⁽²²⁾

この第一期の地域ベ平連の動向を伝える資料は、早い段階であるためか吉川資料のなかでも余り多くは残されていない。ここでは事例の一つとして「茅ヶ崎市民の会」を紹介しておきたい。この会は、一九六六年九月から準備会がもたれ、一〇月に講演会を開催し、ベ平連組織を立ち上げた。一〇月に行われた講演会には、吉川勇一、小田実、浅田光輝らが講師として呼ばれている。この講演会のためのパンフレットには、運動当事者たちの運動を始める動機が書かれて

いる。そこには「人と人とが血をもつて殺し合わなければならぬ戦争に反対」というヒューマニズムに基づく反戦の意識、そして「過去の侵略戦争」へ言及した「戦争の記憶」、が記されており、戦争の記憶とヒューマニズムの結合がみられる。⁽²³⁾ いずれにせよ、この時期の地域ベ平連の発足に「戦争の記憶」が大きく影響していたことは明らかであると思われる。もう一例をあげれば、札幌ベ平連の場合、一九六六年の一二・八ベトナム反戦国際統一行動日の呼びかけ文で、「来たる十二月八日は、わが国が昭和十六年（一九四一年）に太平洋戦争をひきおこしてから二十五年目にあたります。十二月八日は、私たち日本人にとって忘れてはならない日です。この日は、私たちと私たちの国がもう二度と戦争に手をかさないという決意をあらたにする日とならなければなりません。」という「戦争の記憶」から呼びかけ文を始めている。⁽²⁴⁾⁽²⁵⁾

こうした地域ベ平連と東京のベ平連との関係は、運動の当事者自身が述べているように、中央と支部といった上下の関係にはなく、きわめてゆるやかな結びつきしかなかった。⁽²⁶⁾ 一九六七年一〇月に開催された初めての全国懇談会においても、既存の運動組織との関係については討論されたが、各地のベ平連の運動がどのように結びつくのかということが議論された形跡はあまりない。このことは、ベ平連という市民運動組織の強さでもあったが、逆に様々な問題を生み出すことにもなった。早くも一九六六年八月に行われた日米市民会議に対して鶴見良行は「反国家権力的な市民集団をいかにして統括するのかという組織化の問題に当面せざるをえない」と述べており、⁽²⁷⁾ ベ平連にとっての組織の有り様というアポリアについて指摘していた。ベ平連運動にとって、地域ベ平連はどのように位置づけられどのような相互関係を考えていけばよいのかという問題は、第二期、すなわち地域ベ平連の急増により、ますます大きな問題になっていった。

三 急進化と地域べ平連の急増

一九六七年後半に入ると、日本の社会運動は急進化していった。とくに六七年一月の羽田事件、六八年一月の佐世保エンタープライズ入港問題⁽²⁸⁾、そして同年三月以降の王子野戦病院問題などで、デモ隊と機動隊の衝突が繰り返され、また、とくに学生運動の急進化が顕著になった。こうしたなか、べ平連の活動は、ヴェトナム反戦運動以上に反安保を掲げる大衆運動としての性格を強めていった。一九六八年の六月行動月間は、行動開始日を五月一九日、大衆デモを六月一五日に設定するといったように、六〇年安保闘争を明らかに意識したスケジュールで行われた。この六月行動について『海の向こうの火事』の筆者であるヘイブンスは「ベトナム戦争の期間中、日本で行われた純粹に反戦だけを目標にした連続行動としては最も重要なもの⁽²⁹⁾」と述べているが、『べ平連ニュース』が『ベトナム反戦』のシュプレヒコールは、国会に近づくにつれ『安保粉碎』⁽³⁰⁾に変わった⁽³⁰⁾と伝えているように、安保反対が運動の中心テーマへと競りあがっていったのがこの時期であった。こうした運動課題の重点移動は、六八年八月に京都で開催された「反戦と変革に関する国際会議」⁽³¹⁾においても議論されることとなった。この会議の冒頭で小田実は「私はたとえどのようなにはつきりした抗議の意志をどんなに論理的に正確に伝えようとも、私たちの相手であるアメリカ政府と日本政府は動かないと思います。ではどうして動かすか、少なくとも私たちの行動それ自身によって、社会のしくみをいくぶんでも、あるいは部分的にせよ、変革していかないかぎりかれらは動かない⁽³²⁾」と述べている。べ平連の論理からすれば、もともとベトナム戦争に対する日本の関与を問題視し、そこから出発した運動であり、そうであればアメリカのベトナム戦争に協力する日本政府を問題視せざるをえず、日本政府がかたくなに対米協力を継続するとするならば、このような政府を支えている日本社会の変革が問題にされねばならないことになる。その結果、当面の運動課題として日米安保に反対し、さらに日本社会の変革あるいは体制の変革を求める運動が掲げられたといえるだろう⁽³³⁾。

同時に、当時の急進化する学生運動に対し、小田実らの論理は、学生の孤立を防ぐためにも市民的なレベルでの反安保の大衆運動が必要であるという内容を有していた。急進化する学生運動に同一化はしないが、しかし、学生の運動を取り巻くかたちでの市民運動の展開が考えられていたわけである。

ちょうどこの時期には、先に触れたように、地域ベ平連が全国各地に続々と誕生する時期にあたっていた。一九六八年二月に行われた第三回全国懇談会について、『ベ平連ニュース』は「北海道から九州までようやくベ平連の運動も全国的なものになったことを感じさせます³⁴」と述べており、翌六九年二月に行われた第四回全国懇談会についての『ベ平連ニュース』は「参加者が全国各地にわたっていたことも、ここ一年の間に、ベ平連の運動が急速に拡がっていることが判りました³⁵」と地域ベ平連の全国的拡大を報じていた。一九六八年一月七日に大阪で行われた「再びベトナムを考える」という集会で吉川勇一は「今年三月には、大学ベ平連・地域ベ平連を合わせて、大小四〇いくつかのベ平連がありました。：それから今年の夏配った『ベ平連とは』によると一〇八、それが現在二〇〇³⁶を起^マえています。一日に一つの割合で、どこかにベ平連ができていく勘定になります。」と述べていた。

この時期の地域ベ平連の急増は、当時の急進化する社会運動、そして七〇年安保問題を控えての危機感の高まりを背景としていた。第一期の時期と比較すると、地域ベ平連の運動における学生の占める比重が高まり、その結果、地域ベ平連のスローガンや主張も急進的なものが目立つようになった。たとえば、一九六九年二月に開催された第四回全国連絡会では、「多くの地域ベ平連から、学生部分の行動形態がラジカル化するにつれて、初期に参加していた市民が離反してゆく」とか「学生層から市民には理解できない言葉での演説が出たりして次第に市民層の参加が少なくなり」などといった報告がなされている³⁷。また、一九六九年四月の『ベ平連ニュース』第四三号に掲載された座談会で、吉岡忍が、最近の地域ベ平連の呼びかけについて「文章もしだいに硬い調子になってきていて、以前のベ平連から出した投書を集めてつくった本のなかにあるようなナマの感じのものがなくなってきた³⁸」と述べているが、運動の表現様式にも画

一化が進んでいたことが伺われる。

地域ベ平連が出したニュースやチラシの中にも市民からの乖離や学生主導の運動の問題点を指摘するものが少くない。たとえば、三鷹のベトナム反戦ちようちんデモの会では、「ちようちんデモも三十七回を数えたが、パリ会談が始まる頃から著しくなったデモ参加者の固定化と減少の傾向を考慮し、今後のちようちんデモの会の運営について意見を述べ合ってみた。」という記事が第一六号（六九年二月）のニュースに掲載されている。さらに六九年六月に発行された同会の第一九号のニュースに掲載されている井上良雄「今こそベトナムに平和を」でも、「私たちのチョーチン・デモも、もう間もなく満二年目の日をむかえようとしています。私は、このデモがはじめられたことの様子を、今も覚えています。あのころは、この地区の平和団体の人々だけでなく、子供づれの主婦や勤め帰りのサラリーマンや学生や、色とりどりの人たちが参加して、百名近い人たちが、ベトナム反戦の歌を歌って歩きました。それが、二年たった今日ではどうでしょうか。主に学生を中心とした二十名あまりの常連の人たちが、細々とした形でこれ続けているという有様です。」と述べている。⁽³⁹⁾

また、第一期に誕生した地域ベ平連のなかでも、運動の方向性をめぐる意見の対立が発生した。たとえば、京都ベ平連の機関紙『ベトナム通信』では、定例デモを中心とする運動に対する急進的な立場からの批判が強くなり、それに対して、飯沼二郎は「市民的権利」の観点から繰り返し批判を行っている。飯沼は、「私は、京都ベ平連が、学生諸君のラジカルな運動形態にまきこまれることを恐れる。ラジカルな諸君から臆病と罵られ、卑怯者と罵られてもいい。今の運動形態をまもっていき⁽⁴⁰⁾たい。」と述べてラジカルな運動への傾斜を批判し、さらに「自他の基本的人権（人間が人間として生きる権利）を抑圧するものに対する憤りから、市民運動は出発する」、「市民運動と学生・労働者の運動とを混同せず、はつきり区別することが絶対に必要である。」と基本的人権の問題からの市民運動論を展開している。⁽⁴¹⁾こうした飯沼の市民運動に対する立場は、「六・四の定例デモでその感じを強くしたのだが、このころ、ベ平連の性格・ムード

が、その独特の持ち味を失いつつあるのではないか。⁽⁴²⁾ といったデモ参加者の投稿に示される違和感と結びついてきた。この問題について、やはり市民運動に積極的にコミットした知識人の一人である久野収は、のちに「生活」の問題にひきつけて問題点を整理している。すなわち彼は「ベ平連の街頭行動をささえる根は、このような日常的生き甲斐を自分の選択した『場』で実現しようとし、自分の『生きざま』を証明しようとする市民グループでなければならない」と述べ、「生活の根を持ちにくい若もの」が主導する運動の問題点を指摘したのである。⁽⁴³⁾

しかし、急増した地域ベ平連が一樣に学生主導になり市民の離反が進んだというわけではなく、地域によってかなりの違いがあったのではないかと思われる。たとえば、『ベ平連ニュース』第三八号に寄せられている長野県のベ平連の動向を伝える記事は、県内四つのベ平連（長野、飯田、松本、上田）について「スローガンは穏健なものからラディカルなものまで差が著しく…全国的にはもつとその差は大きい」と記している。⁽⁴⁴⁾ また、大阪の高槻ベ平連では、六八年一月二〇日の集会に様々な階層の人々が集まったことや、同年二月一〇日に行われた広島ベ平連の定例デモに、参加者が百名あり、そのなかには子供連れの主婦の姿も見られたことが報じられている。⁽⁴⁵⁾ 地域ベ平連が急増したこの時期にあっても、必ずしも学生だけの突出した運動にはおさまらない活動が展開されていたといえるだろう。

この時期に誕生した地域ベ平連の一つとして「佐世保十九日市民の会」を取り上げてみたい。この市民団体は、エンタープライズで佐世保市内が騒然としたなかで誕生した。ほぼ同じ時期に佐世保では佐世保ベ平連も誕生している。「十九日」というのは、エンタープライズが佐世保港に入港した日（一月一九日）である。佐世保には、以前から核基地化反対市民会議や佐世保文化人会議などの市民団体があったが、団体加盟であったり、主体的に活動する市民団体ではなかった。この会は、佐世保の衝突に加わった市民は「意識の高い一部の人々でありそのような人々はまさかの時は一人立ちできるにちがいない。むしろ、そのような気持ちを中心のすみに抱きながら行動に参加できなかった人達こそ、大切にすべきだし、掘り起こしていくべきだ」⁽⁴⁶⁾ という考えに基づいてつくられた。エンタープライズをめぐる激しい機動

隊との衝突に目を奪われがちであるが、そうした「嵐」が吹いたあとの地域での反戦平和運動をどのように展開するかという発想を確認することができるだろう。佐世保では、エンタープライズが去った四ヵ月後の五月に原潜ソードフィッシュが入港し、異常放射能が検出されるという事件が起った。当初、漠然とした反戦平和を呼びかけ政治にはノータッチという原則の下で発足した十九日市民の会は、この事件をきっかけに原潜寄港反対、基地撤去をスローガンに掲げ、抗議運動を展開するようになった。この会はその後も継続的に定例デモを続けてゆくこととなった。

また、ベ平連の運動の方向性に影響を与えた京都国際会議での「反戦と変革」をめぐる議論についても、地域ベ平連の間には受け止め方の相違があった。たとえば、京都會議直後の六八年八月一八日に「反戦と変革のための国際会議九州集会」が開催されたが、この会議に参加した佐世保ベ平連は、「社会改革を掲げることは、反戦をめざしてきたベ平連が、しかも市民運動がそれを掲げたとしても、運動を狭めるだけで中広い市民の参加をますますむずかしくしよう。大体、労働者部隊を主力としない、市民団体のベ平連で、革命が問題になり得ようか、そもそも『変革』とは何を指すのか」といったかなり厳しい批判を行っている。⁽⁴⁷⁾

この時期の地域ベ平連運動は、反戦と変革の間で、急進化する学生運動と地域社会の間で、揺れ動いていたといつてよいだろう。一九六九年八月七日から一日まで、関西ベ平連が中心となって開催された「反戦のための万国博」(ハンプク)に参加した鶴見良行は、そこに集った地域ベ平連が様々な方向性をもった、従来見られない試みを行っている指摘しているが、まさに、ベトナム反戦運動から始まった地域ベ平連の運動は、運動の課題、運動のスタイル双方において多様な展開を示し始めていた。⁽⁴⁹⁾

四 運動の沈静化と地域課題

しかし、ベ平連関係者のなかでは、実際に安保改定の年にあたる一九七〇年になると次第に運動の沈静化を指摘する声が目立ってくるようになった。たとえば、「声なき声の会」の小林トミは、「六八、六九年と盛んだった反戦運動も、七〇年になるとどこことなく沈滞ムードがただよいはじめている」と『ベ平連ニュース』七〇年六月号で述べている。また、『週刊アンポ』第八号（七〇年二月）では、「市民運動―自省と噴出のはざままで」という特集が組まれ、そこでは「安保ということばが、一九七〇年のはじめから電波や紙上から消え去っている。消え去った安保を、いま、市民運動は確実に掘りおこしつつある。」との指摘がなされている。⁽⁵¹⁾ 地域ベ平連のなかからも、運動の後退や沈滞を指摘する声が目立つようになる。そして実際に、地域ベ平連の活動もまた停滞していった。たとえば、『ベ平連ニュース』第六五号（七一年二月）には「六九年から七〇年にかけて一時は数十種類も出ていた各地の反戦市民運動グループのニュースや通信類が、昨年夏頃を境にほとんど姿を消してしまった」という記事がある。⁽⁵²⁾ もうひとつ具体例を挙げると、比較的早い時期から活動を行ってきた札幌ベ平連は、一九七一年七月に定例デモを中止している（七二年七月に再開）。

六九年から七〇年前半にかけて、佐藤・ニクソン会談（六九年一月二一日）、ニクソン政権による「ヴェトナム化」計画の提示（六九年一二月一五日）、そして七〇年六月二三日の安保自動延長という流れのなかで安保問題に対する人々の関心は薄れていった。そのような状況のなかで、注目されるのは、こうした運動の後退期に入って地域における運動や地域ベ平連の相互関係についての議論が行われ始めたということである。一九七〇年から七一年にかけての二年間は、この間に四回の全国懇談会と一回の反戦反基地全国懇談会が開催されるなど、地域ベ平連が意見交換を行う場が最も頻繁に設けられた時期にあたる。そこでは、様々なことが議論されたようであるが、注目すべきなのは、次のような点である。

それは、一九七〇年前後に「運動の原点」をめぐる議論が始まっていることである。早い段階では、すでに一九六九年九月にベ平連福岡の女性が「もういちどはじめにもどそう」という文章を『ベ平連通信福岡』に載せ、それが『ベ平連通信』に転載された。彼女は、六九年二月に「反安保を統一のスローガンに加えた」ころから運動がおかしくなったような気がすると述べ、「反戦の、より人間らしく生きたいこと」を志とする一人一人の参加による運動の原点に立ち戻るべきではないかという主張を行っている。⁵³ また、小田実も、七〇年の冒頭には「もう一度『草の根』からのものを日本中にまき起こしたい」「地域的な運動を起こした方がいい」というように、運動を草の根から、地域から再構成することを主張するようになった。⁵⁴

この頃から、地域ベ平連は、東京のベ平連が提起する運動課題に応える組織ではなく、個々の地域ベ平連が個々の地域が抱える問題への取り組みを通じて、反戦平和運動を展開するというかたちに変化していくことになる。その結果、個々の地域社会のなかで、地域社会とどのようにかかわっていくのかという問題が浮上してくるようになる、それと共に、地域ベ平連が取り組む課題自体も多様化してゆくこととなった。

ベ平連の運動は地域の課題に直面するなかで、変化を遂げていった、あるいは変化を遂げていかざるをえなかった、と言えるのではないだろうか。

ただし、ここで留意しなければならないいくつかの問題点を指摘しておこう。

第一に、地域課題に直面するなかで、ベ平連の運動と実際に地域で展開される運動とのギャップが認識されていたということがある。少し早い時期になるが、この点がもっとも明確に示されたのは、沖縄の問題であった。一九六八年の京都国際会議の後に原水禁沖縄大会に参加するために沖縄に渡った報道写真家の栗原達夫は、沖縄の運動関係者からかなり厳しい批判を受け、自分たちベ平連関係者は「沖縄人民にとって本土のお客さん以上ではなかったのではないか」と述べている。⁵⁵ ただし、このような地域という現場との接点をもっていたが故に、そして、地域の現場の声に耳を

傾けることを通して、ペ平連に参加していた学生層の一部は、単に運動に挫折し、あっさり社会運動から身を引くのではなく、社会運動への関わり方を追求していったのではないかと考えられる。⁽⁵⁶⁾

このことを示すいくつかの事例を、『週刊アンポ』第八号の特集へ自立した市民の運動はつづくのなかに収録されている記事のなかから紹介してみよう。

金沢ペ平連に参加した学生は、「ただいま総勢三〇名前後、平均年齢二〇歳前後、大学生と同じ年代の人々が多いにもかかわらず（？）学生は五く六人しかいない」と金沢ペ平連の構成を紹介したうえで、次のように述べている。

「金沢にあるグループでなんといっても興味深いと思われるのは、グループ・ジャンヌ、闘うジャンヌダルクなのだ。金沢は男女の数は半分ぐらいずつで、G・ジャンヌはまさしく女の子（彼女らは女性だ！と言う…）ばかりのグループ。ペ平連のキレイドコロがズラツという噂は全くないが、女性解放と人間解放のために闘っている。毎週読書会などをやっているが、最近は男性の非暴力直接介入をうけている。フリーセックス・性教育のことをまじめに討論することもある。⁽⁵⁷⁾」

この文章からは、ようやく地域ペ平連のなかから女性解放運動の萌芽のような動きが始まりつつあったことを見て取ることができるだろう（ただし、この文章には男性の側からの揶揄も多分に含まれており、当時の社会運動における女性の位置を表してもいる）。

鹿児島でペ平連に参加している学生は、「日常の運動のなかで、どこに重点をおいているんですか？」との問いに次のように答えている。

「鹿児島っていうのは、ほんとに田舎なんですよ。だから、そうしたところにある青年団のようなもののなかに入っ
ていって、じっくり話しあっていきたいという気持はあるんです。農村の問題っていうのは、とても地味なだけで、
大切でしょう。たいしてできないかもしれないけど…」⁽⁵⁸⁾

ここには、いかにすれば地方で運動を持続することができるかという課題意識が示されており、それは、「毎月七日の月例デモの参加は一ケタ―ここに大きな悪循環がある―人数が少ないからデモに加わらない。そんな人が加わらないから人間の渦巻ができない。中央での何万何千というデモを聞く時、アセリと消耗感（ビラまきしても反応がない）が先立ち、ややもすればもうやめたいという空気が流れる⁽⁵⁹⁾」という地方での活動の困難さと表裏一体のものであった。

この問題と関連して、第二に、岩国市での反戦喫茶「ほびつと」のように、地域社会に根を下ろしたかたちでの反戦運動の拠点づくりや、相模原の輸送車通行阻止闘争における条例制定要求の運動のような自治体に働きかける運動など、具体的な運動の試みが行われ始めた。反戦喫茶「ほびつと」は、一九七二年二月二五日に開店したが、同年六月四日には警察の家宅捜査を受け、さらに六月二二日には米軍が立入禁止命令を出すなど、日本側警察や米軍の圧力にさらされながらも、一九七五年まで営業を続けた。「ほびつと」のような運動は、地域のくらしや地方の問題の重要性を浮き上がらせることとなった。中心人物であった中川六平は、「ほびつと」の経験により、「地方に立ちつづけることが、いかに困難であるか、困難であるが故に、いかに重要なのか、ということ⁽⁶⁰⁾」を発見したという。また、相模原の問題は、一九七二年八月一四日に輸送車阻止のために常設テントが設置され、二二日に機動隊が急襲、それを受けて翌二三日に「ただの市民が戦車を止める会」を発足させ、九月一八日に市民数千名がゲート前に座り込みを行い、翌日機動隊が市民を排除し平連関係者も逮捕された。そして、その後、輸送車阻止のための条例制定の運動を開始した。この点について、横浜ベ平連の麻生薫は次のように述べている。

「ノースピアから相模原の闘いは、自治体というものが単に国家の行政機関の一部でしかなく、革新自治体など議会主義のアダ花でしかないというような認識の再検討を迫っているものである。自治体は一定程度まで国家権力と対決することができる。しかし、どこまでできるかは、自治体を支えている人々が、様々の政治状況の中で自治体の持ついる小さな権力を引き出し、どこまでそれを利用できるかにかかっている。しかし、いま運動の側でこのような認識が

けていることは確かであろうし、また充分利用できる運動が成長していないことも確かだろう。⁶¹」
 地域ベ平連の運動を通じて、戦車阻止のための座り込みなどの実力行使とともに、自治体のもつ可能性という問題にも視野が広がっていったことがわかるだろう。

第三に、地域の運動とのかかわりを深めていくなかで、アジアとのかかわりという問題への関心が深まっていった。たとえば、大村収容所問題がこの時期に取り上げられたり、出入国管理法問題などに直面するなかで、アジアとのかかわりという問題関心が出てくることになる。『ベ平連ニュース』を見ていくと、ベトナム戦争そのものに関する記事やアジアに関する記事が意外と少ないことに気がつくが、一九七一年の第七三号から「アジアからの視線」が連載されるなど、紙面に変化が見られるようになった。これをヴェトナム戦争認識という観点からとらえ直すならば、日本におけるヴェトナム反戦運動のなかに「アメリカとの戦争」「日本が加担する戦争」という見方はあっても、「アジアでの戦争」という観点は、少なくとも運動の初期の段階では希薄であったということができるだろう。

しかし、アジアへの視点という問題は、ベ平連というよりも、当時の日本の市民運動の弱点のひとつであり、小田実などは、そうしたアジアへの視点の欠落という問題を明確に認識していた。たとえば、一九六七年八月の思想の科学研究会総会の際に行われたシンポジウム（「学問・思想の方法をめぐって」）のなかで、小田は次のような「思想の科学」批判を行っている。

「思想の科学をみていて、率直に言って、やはり日本と西洋しかないとと思う。その間の国が脱落しているという感じがつくづくします。たとえばアジアの国々、中国はべつとして、またベトナムはこのごろよくでますけれど、タイ国はどうなるのか、ビルマ、インド、あるいはレバノンはどうなるのか、という問題はでてこない。そういう問題はやはりいれなくてはいけないと思う。市井さんは日本人という特殊な運命をになつておっしゃったけれど、ぼくは逆に世界人である特殊な運命をになつておられると思う。そしていまやこの問題に直面しているのではないか。⁶²」

当時の市民運動関係者に広く読まれていたと思われる『思想の科学』に対する小田の批判は、日本の市民運動全体に対する批判と考えてよいだろう。しかし、小田のようなベ平連運動の中心人物にアジアへの視点があつたとしても、ベ平連の運動のなかにそうした視点がどこまで浸透していったかどうかということは別問題である。ベ平連の運動が、アジアとくに朝鮮半島問題に全く無関心であつたわけではない。たとえば、金東希や金鎮珠などの韓国人脱走兵問題を支援したのもベ平連であつた。しかし、同じ脱走兵支援でも、アメリカ軍人脱走兵支援の背景には、さらにベ平連の反戦運動の様々なアピールにも国境を越えた「アメリカ市民」との連帯という考えがあつたが、たとえば、ヴェトナムに軍隊を派遣していた韓国人々との市民的連帯をどのように考えるのかという議論はみられない。つまり、ベトナム反戦運動における「アメリカ市民」との連帯と対比しうる、「韓国市民」さらには「アジア市民」との連帯といった議論が見られないのである。この問題については、ベ平連関係者自身が以下のように指摘している。

「ベ平連運動は、過去二回、朝鮮人問題にかかわってきた。金東希、金鎮珠。しかし、この二例とも、彼ら個人のベトナム戦争との直接的な関係においてのみ取り上げられ、それ故に、彼ら個人が日本を去ると、ベトナム反戦運動を行なう中で日常的な視点から、朝鮮人問題という普遍的な視点にまで問題意識を拡大することの出来なかつた運動は、「一定の勝利」という総括を残して解消してゆかざるを得なかつた。その意味で、金東希・金鎮珠支援運動は、朝鮮人問題にきりこむ潜在的な質を持ちながらも、現象的には、ベトナム反戦運動の一環としてしか闘われなかつたと言えるだろう。これはなにもベ平連運動に限られたことではなく、日韓闘争においても、それは状況論的取組でしかなく、日本人にかかわる朝鮮人問題—アメリカにおける黒人の問題が、黒人問題ではなく白人問題と言われるように、日本人問題であるわけだが—への視点の獲得は、本年初期よりようやく取上げられだした大村収容所解体闘争、現行入管法および改悪入管法案粉砕闘争をまたなければならなかつた。⁽⁶³⁾」

すでに指摘したように、『ベ平連通信』や他の地域ベ平連の発行物を見ても、一九七〇年前後まではアジア関係の記

事は意外なほど少ない。べ平連の運動のなかでは、こうした地域課題へのかかわりやアジアという視点の広がりがあったものの、運動としてそれをどのように取り上げ展開していくのか、という点については明確な結論が出たわけではなく、むしろ個々の運動の自主性を尊重するというかたちの対応がなされた。全国懇談会を開いても、個々の活動報告がなされるだけだという批判の声がある一方で、個々の活動報告から刺激を受けて各地でそれぞれやればよいという肯定の声もあった。

五 べ平連の解散

一九七二年頃からべ平連の解散をめぐる議論が行われ始める⁽⁶⁴⁾。早い時期に解散をめぐる話が持ち上がったのは京都べ平連であった⁽⁶⁵⁾。京都べ平連は、七二年一月二三日に「京都べ平連をどうするか」という討論集会を行い、翌七三年四月三〇日に解散集会を開催した⁽⁶⁶⁾。そして、比較的早い時期から活動を行ってきた札幌べ平連も、七三年三月ごろから解散問題が話題になったようである⁽⁶⁷⁾。

東京のべ平連は一九七四年一月二六日に解散集会を行い翌日に最後の集会とデモを行ってべ平連としての行動を終えた⁽⁶⁸⁾。しかし、当然のことながら、中心なき、上下関係なき形態をとっていたべ平連であったので、全国の地域べ平連が一斉に解散したわけではなかった。京都べ平連のように東京のべ平連以前に解散したものもあり、自然消滅したべ平連も少なくなかったのではないかと思われる。

他方、東京のべ平連の解散の後も、べ平連的な運動を持続させたものもあった。先に言及した山口県岩国市の反戦喫茶ホビットもその一つであった。

多くの地域べ平連が消滅するなかで、街頭での民主主義にこだわりそれを継続したものもあった。三鷹を拠点にした

ちようちんデモの会や佐世保の十九日市民の会は、その後も定例デモを継続し、反戦平和の市民運動を次の世代に伝える役割を果たした。

また、地域ベ平連自体は消滅したものの、ベ平連での経験をバネに、一九七〇年代以降の市民運動や政治活動を行った人々もいた。たとえば市民派の地方議員として、地方議会に活動の場を見いだした者もいる。

さらに、東京のベ平連を担った人々を中心として一九七三年一〇月に設立されたアジア太平洋資料センター（PARC）は、ベ平連運動の展開過程のなかで浮上した日本とアジアの関係を民衆レベルで構築する機関として、その後のユニークな活動を行うこととなった。

このようにベ平連の解散は、六〇年代後半の日本の社会運動の一つの区切りを意味していたが、同時に、その後の多様な社会運動の担い手を生み出し、また、社会運動が取り組む多様な課題を次の時代に伝えることになったと言つてよいだろう。

むすび

以上、四つの時期にそつてベ平連運動の推移を、地域の運動に着目しながら見てきたが、ここでの議論を簡単にまとめてみたい。

まず、ベ平連の地域レベルでの運動は、一九六五年から六七年まで各地で自然発生的に地域ベ平連の組織が立ち上がり、その背景には、当時まだ広範に存在した「戦争の記憶」をバネとした非戦・反戦意識があったと言える。同時に、運動の形態は、東京のベ平連が呼びかける様々な運動に呼応したり、定例デモのような東京のベ平連がとつた運動スタイルに類似した活動を行つたりした。そこには、組織による動員ではなく、個人が自発的に参加するという新しい運動

形態に対する共鳴があったといえるだろう。

次に六七年末から六九年にかけて、学生運動を中心とした社会運動の急進化のなかで、地域ベ平連も急増した。そうしたなか、一九六八年夏の京都で開催された国際会議で「反戦と変革」がテーマとして取り上げられたように、ベ平連の運動は、変革の問題、具体的には安保の問題を掲げることになった。こうした運動の変化に対して、地域ベ平連の反応は様々であった。積極的に体制変革を掲げるものもあれば、体制変革という問題はベ平連の運動とは相容れないのではないかと考える者もあった。

しかし、一九七〇年に入ると、日本の社会運動全体が沈滞し、ベ平連の運動も例外ではなかった。日米安保の自動延長、ベトナム戦争の推移、などが作用したことは疑えないことである。さらに、新左翼内部の内ゲバの激化や連合赤軍事件などがこうした運動の沈滞に拍車をかけた。このようななか、地域ベ平連は、東京のベ平連が提起する運動に呼応したり定例デモを行ったりという従来の活動から、それぞれの地域課題に取り組む運動へと変化していった。

同時に、そうした地域課題に取り組むなかで、アジアの問題との接点を獲得することとなった。ベ平連の運動は、国境ではなく国境を越えた市民との連帯を掲げた点に大きな特徴があったが、当初そこでイメージされた市民はヴェトナムに侵略するアメリカの市民であった。国境を越えた市民の連帯という発想それ自体には大きな意味があったが、そこには、アジアの市民という発想は希薄であった。ようやく運動の後退期になり、地域課題、そしてそれを通じたアジアとのかかわりという視点を獲得していったといえるだろう。

しかし、まさに運動の後退期であったこと、そしてベ平連という運動体を中心なき上下関係なき運動体であったゆえに、このような問題にどのように取り組むのかということとは、大変困難な問題であった。

以上のように、ベ平連の運動を振り返ってみると、この運動は、運動スタイルや戦争認識といった面で、これまでの研究も指摘しているように、日本の社会運動にある種の新しさを持ち込んだ。また、本稿でみてきたように、実は運動

の展開過程のなかで、地域課題やアジア認識など新しい課題や考え方が生まれてきた。

ただし、一九六〇年代後半に多くの人々を社会運動の場へ参加させることとなったベ平連の運動が、一九七〇年に入り、運動の曲がり角を迎えたのは、ヴェトナム戦争の帰趨という問題ももちろんあるが、この間の日本社会の変容の問題も多分に影響していた。戦後日本の政治文化の変容を分析した加茂利男は、一九六〇年代後半から七〇年代の時期を「戦後体制」の中折れ、揺らぎの時期と規定し、次のような説明を行っている。

「一九七〇年代以降の政治文化は、護憲・再軍備不要・戦後民主主義の肯定という戦後型政治意識の層では大きな揺らぎをみせなかった反面、企業・成長経済依存Ⅱ「私」志向型・現状肯定型（「私生活保守主義」）の態度は六〇年代後半―七〇年代前半には相当な揺らぎをみせたものの、八〇年代には経済大国意識と重なり合いながら、再定着・強化の方向を辿ったのである。「戦後民主主義」に対する素朴な思い入れや『参加』『運動』感覚が弱まり、政治的疎外（political alienation）意識が拡大したのも七〇年代以降の特徴であった。⁶⁹」

政治的価値意識のレベルよりはむしろ社会的価値意識のレベルでの揺らぎと変容が進行したのが六〇年代後半から七〇年代にかけての日本であり、ベ平連の運動もそうした状況の変化からの影響を受けざるをえなかった。一九七一年一月に開催されたベ平連全国懇談会では、日本の現状が『民主ファシズム』『平和軍国主義』『皆殺し福祉主義』という三つの言葉で語られた。これは、高度経済成長のなかで企業社会化と生活保守主義が拡大・浸透するなかでの市民運動の困難についてのベ平連流の表現であると言ってよいだろう。

また、アジアにおける国境を越えた市民レベルの連帯という課題も、当時の韓国の軍事独裁体制、中国における文化大革命による混乱など、東アジアの分断状況のなかでは、極めて困難な条件の下にあったといえるだろう。

今日の社会運動の有り様からみて、ベ平連の運動は、過渡的な性格を持った社会運動でもあった。⁷⁰ まず、ベ平連の運動はそもそも非戦の意識から出発した反戦運動であった。⁷¹ したがって、高度成長期に登場した生活レベルの問題、ある

いはポスト産業社会における政治課題などについては、必ずしも関心が高かったわけではなかった。⁽⁷²⁾ 当時の革新自治体に対する関心の希薄さというのもこの辺に一つの背景があったと考えられる。⁽⁷³⁾

また、ベ平連の運動は、六〇年の安保闘争とは異なり、戦後民主主義に対する批判も含まれていた。ベ平連が戦後民主主義に對置したのは直接民主主義であり、多くの地域ベ平連が定例デモを行ったりティーチンを行ったりしていたことが示唆するように、それは街頭民主主義（広場の民主主義）とでも呼ぶべきものであった。それは、戦後民主主義に對するラジカルな批判の視座を提供するものであったが、その後の住民投票や非核自治体条例運動などに見られるような、代議制民主主義と街頭民主主義（広場の民主主義）の間の領域にある様々な民主主義的な活動の可能性については、十分視野に入っていなかったのではないかと思われる。さらに、ベ平連は、従来の組織を中心とする社会運動に對するアンチの運動としての性格が強かったわけであるが、では、自発性に基づく市民運動と様々な既存の組織との関係をどのように考えるのか、あるいはまた、自発性に基づく個々の市民を基本としながら運動体としての市民運動をどのようにつくりあげていくのか、といった課題は残されたのではないかと思われる。⁽⁷⁴⁾

とはいえ、ベ平連の運動は、この運動が全国各地に自然発生的な形で多くのベ平連組織を生み出し、具体的な課題に取り組んでゆくなかで、人と人との、あるいはアジアとの新しい関わりを模索する出発点の一つを提供したのではないのだろうか。その意味では、ヴェトナム戦争は、日本の社会運動のなかに、新しい芽を生み出すきっかけを与えたのであり、その芽は、多様なかたちでの住民運動や市民運動のなかに引き継がれていったと言えるだろう。

最後に、とくにアメリカによる対イラク戦争を契機にした最近の日本での反戦平和運動との対比の問題について若干触れておきたい。⁽⁷⁵⁾ 今日の日平和運動と対比する際に視野に入れておく必要があるのは、表現形式ないしは表現手段の相違の問題である。ベ平連の運動は、本格的なマスコミ時代に登場し、それをうまく利用した運動であったと言われる。確かにそのような側面があったことは否定できないが、他方で、地域ベ平連の活動を見ると、発行されていた機関紙やチ

ラシなどの多くはまだガリ版刷りであり、当時の活動家たちの手書きの表現である。いわゆる学生運動風のものも少なからずあるが、表紙のデザイン、ページの構成など、工夫を凝らした独特のものも多く、運動が一つの自己表現の場であったことを伺うことができる。そして、そのような自己表現としての運動であったから、それは反転して自己のあり方を問うという思考を促したとも言える。ただし、ベ平連の運動原理や地域課題への取り組みを通して、その自己のあり方を問いながらも、他者や地域とどのようなつながりうるのかという連帯の論理を模索したところに、全共闘などの学生運動（自己否定）とは異なる論理があったことを指摘することができるだろう。

いずれにせよ、現在のインターネットを利用した様々な情報のやり取り、そのなかでの様々な社会運動の展開のなかでは、ベ平連の時代の自己表現がネット社会においてはどのような形で可能なのか、言い換えれば、自己表現と自己言及の往復運動、そしてそのような往復運動を通じての他者との連携や連帯がどのような形で可能なのかということが問われているのではないかと思う。

注

(1) 本論文は、二〇〇三年度歴史学研究会大会現代史部会「ヴェトナム戦争と東アジアの社会変容」において行った報告（「ヴェトナム戦争と日本の社会運動」）に加筆修正を行ったものである。この報告内容は、『歴史学研究』別冊（二〇〇三年一〇月）に収録されているが、脚注等を割愛した報告要旨である。歴史学研究会大会当日、コメンテーターとして貴重なご意見をいただいた由井大三郎、高橋勝幸両氏、フロアからご意見ご批判をいただいた大会参加者の方々、大会終了後「大会報告批判」（『歴史学研究』第七八三号、二〇〇三年一月）のなかで様々な指摘をいただいた古田元夫氏に、謝意を表します。

(2) 六〇年安保闘争については、日高六郎『一九六〇年六月一日』岩波新書、六〇年代日本の社会運動をリードした「革新国民運動」とその退潮の背景については、高島通敏「大衆運動の多様化と変質」日本政治学会編『日本政治学会年報 五五年体制の形成と崩壊』岩波書店、一九七九年。また、草の根の市民運動の発生と六〇年安保闘争との関連についての近年の研究として、W.

Sasaki Uenura, *Organizing the spontaneous : citizen protest in postwar Japan*, University of Hawai'i Press books, 2001.

- (3) 岡本宏編『一九六八年―時代転換の起点―』法律文化社、一九九五年。
- (4) 荒川章二「占領の『清算』と新しい社会運動」『歴史学研究』第七六二号、二〇〇二年。
- (5) ベ平連の名称は、高島通敏、小田実らによって発案されたが、当初の名称は「ベトナムに平和を！市民連合」という名称が確定した。一九六六年一月一六日に開催された第一回全国懇談会で「ベトナムに平和を！市民連合」という名称が確定した。
- (6) 戦後日本の社会運動史のなかのベ平連の位置づけについて、高島通敏は「戦後日本ではじめての革新政党や労働組合から独立した大規模な大衆運動の成立であると同時に、六〇年代後半における最大の大衆行動であった」と述べている。（高島、前掲論文、三五二頁）。
- (7) 高島前掲論文は、ベ平連運動を対抗文化と結びついた若者運動として捉えており（三五三頁）、また、今防人は学生運動におけるセクト争いに「愛想を尽かしたり、ついていけない学生大衆」の運動であり、同時に若者たちが「自己表現の場」を求めた運動であったと指摘している。（今防人「大衆運動」神島二郎編『現代日本の政治構造』法律文化社、一九八五年、二五一頁）。
- (8) ここでは脱走兵問題については本格的には取り上げないが、脱走兵支援運動については、阿奈井文彦『ベ平連と脱走米兵』文春新書、二〇〇〇年、関谷滋・坂本良江編『となり脱走兵がいた時代』思想の科学社、一九九八年、が参考になる。
- (9) 高島前掲論文、今前掲論文以外には、トーマス・R・H・ヘイブンス『海の向こうの火事―ベトナム戦争と日本1965-1975』筑摩書房、一九九〇年、三宅明正・庄司俊作『現代社会運動の諸局面―歴史学研究会・日本史研究会編』講座日本歴史12現代2『東京大学出版会、一九八五年、国長法子『ベ平連運動―認識と関係の展開―』（筑波大学比較文化学類卒業論文、旧ベ平連ホームページ（<http://www.jca.org/beheiren/>）掲載）、淵邊朋広「ベ平連運動研究序説―市民運動の登場と展開―」（一九九九年早稲田大学大学院文学研究科修士論文、旧ベ平連ホームページ掲載（修士論文を改訂したもの））などがある。
- (10) ベ平連運動において知識人が果たした役割について、以下のような指摘がある。「ベ平連が知識人、文化人のイニシアチブで開始された運動であることは疑いえない。そして六五年当時は、そのことがそれなりに効果を持ちえたのも確かである。行動する知識人、文化人の登場であった。六〇年安保の知識人が主として言説に頼り、論壇を主なフィールドに選んだのに対し、これらの知識人は、街頭集会と言説を同時にフィールドとすることによって影響力を持ちえたのである。」（今、前掲論文、二四七頁）。
- (11) 東京都内にも、いくつものベ平連組織が誕生したが、ここで「東京のベ平連」というのは、小田実らを中心として吉川勇一を事務局長とするベ平連を指す。「東京のベ平連」は事務局を幾度か変わり、事務局の所在地を冠して呼ぶことが多かった。「東京のベ平連」の事務局が神楽坂におかれた期間が比較的長かったため、「神楽坂ベ平連」の呼称が用いられる頻度が高い。
- (12) 本稿の作成にあたって、九州・沖縄地区のいくつかの地方新聞（『西日本新聞』『南日本新聞』『琉球新報』『沖縄タイムス』）にもあたってみたが、ベ平連関係の記事はそれほど多くない。当時のマスコミ、とくに地方マスコミの市民運動に対する認知度がそ

れほど高くなかったと思われる。

(13) 前掲、旧ベ平連HP。

(14) 様々なベ平連組織をどのように分類するかということも重要な問題の一つであるが、現段階では、個々のベ平連運動についての十分な検討ができないので、はっきりとした分類の作業を行うことはできない。一つの手がかりになるのは、『ベトナム通信』に掲載された、一九六九年二月に行われた全国懇談会の参加記である（小池はるお「さまざまなベ平連 全国懇談会の報告」『ベトナム通信』第一四号、一九六九年三月、『復刻版 ベトナム通信』不二出版、一九九〇年（以下『復刻版』と略記する）、九〇頁）。それによれば、ベ平連には三つの型があるとされ、第一は、東京・大阪・京都などの「大都市ベ平連」。第二の型は、大学ベ平連。大学ベ平連については「人数としては二〇―五〇人。ベ平連の中でも最もラディカルな部分を形成している。東京の大学ベ平連の活動家は、『一般学生』からベ平連に参加した学生より、学生運動を経験した活動家が多いように思う。関西の大学ベ平連はその逆の場合が多い。東京の大学ベ平連が関西の大学ベ平連よりもラディカルな理由の一つだろう。」という特徴が指摘されている。第三の型が「地方のベ平連」。これについては「ベ平連運動の初期に必ずある活動家の不足という状態が、長く続いているという報告があった。保守県政・地域の人々の無関心・そして大学の自治会は民青系という中であって、第一・第二の型のベ平連とはまた違った活動の苦労がある。」という。この報告で取り上げるのは、第三の型が中心であるが、この第三の型は、地方の県庁所在地などの比較的大きな都市（名古屋、福岡、札幌、北九州など、こうした都市には大学もあり、地方の知識人層及び学生がいる）、地方の小都市（米子、都城、岩国など、大学などもないか少数である）、東京・大阪・京都といった大都市近郊の都市（大都市との連携も可能な地域、ベトナム反戦ちようちんデモの会など）、という分類も可能であろう。これは都市の規模や地理的条件に留意したものであるが、同時に米軍基地や自衛隊の有無によって地域ベ平連を分類することも可能ではないかと考える。

(15) ベ平連の発足についての当事者たちの回想として、小田実『ベ平連』・回顧録でない回顧』第三書館、一九九五年、二一―三二頁、吉川勇一『市民運動の宿題』思想の科学社、一九九一年、九二―一〇三頁、小林トミ『声なき声』をきけ』同時代社、二〇〇三年、九一―九四頁、などがある。

(16) 「各地のうごき」『ベ平連ニュース』第二号、一九六五年一月二五日（『ベ平連・ベトナムに平和を！』市民連合『ベ平連ニュース1965-1974 脱走兵通信・ジャテック通信』一九七四年（以下『縮刷版』と略記する）、四頁。

(17) たとえば、『ベ平連ニュース』第四号（一九六六年一月発行）には、日本の白地図に七か所の市民団体が記載されており「日本各地の市民の間に反対の世論とそれぞれの行動が根強く広まっています。」と書かれている。白地図に記載されている団体は、仙台市民ベトナム委員会、「ベトナムに平和を！」市民文化団体連合、「ベ平連」伊那谷の会、「ベトナムに平和を！」松本市民の会、「ベトナムに平和を！」京都集会、ベトナムに平和を願う大阪府民の会、「ベトナムに平和を！」神戸集会（『縮刷版』、七頁）。

- (18) たとえば、ベ平連伊那谷の会の場合「『ベ平連』の存在は前から知っていましたが『ニューヨーク・タイムス』への反戦広告のための募金運動のを知り、一緒に運動をやってみようと、この会が誕生しました」という経緯で発足した（北沢豊美「『ベ平連』伊那谷の会」『ベ平連ニュース』第二号、『縮刷版』、四頁）。
- (19) ベ平連の中心人物小田実の反戦平和運動の原点にある思想が、彼の「戦争の記憶」から構築された「難死の思想」であることは広く知られている。小田の「戦争の記憶」と反戦平和思想を戦後思想のなかに位置づける試みとして、小熊英二「民主」と「愛国」新曜社、二〇〇二年、がある。
- (20) 武藤一羊「『ベ平連運動』の思想―戦後民主主義のゆくえによせて」（ベトナムに平和を！市民連合編『資料・「ベ平連」運動』上、河出書房新社、一九七四年（以下『資料』と略記する）、一六五―一六六頁）。
- (21) 鶴見俊輔・開高健・小田実編『平和を呼ぶ声』番町書房、一九六七年、九六頁、一〇七頁。
- (22) 北沢豊美「『ベ平連』伊那谷の会」『ベ平連ニュース』第二号、『縮刷版』、四頁。
- (23) 茅ヶ崎市民の会『変革の世代』創刊号（一九六七年五月）（吉川資料）。
- (24) 『札幌・ベ平連ニュース』第一号、一九六六年二月二六日（吉川資料）。このニュースのなかには、札幌ベ平連の参加者の一人、安部和二郎「車イスでデモ」と題する文章も収められており、そこでは「脳性小児マヒで走ることも、逃げることもできない私は、戦争中、神戸で何度となく経験した、あの空襲の恐ろしさを、いまこのときまざまざと思い出して、戦争への憎しみを、さらに強くしたのである。」（二〇月一六日のデモの参加記）とある。また、旭川ベ平連が一九六六年二月九日に開催した講演会にむけてのチラシ（吉川資料）も、「二年前の八月、夏の盛り、広島の空にピカドンの煙が悪魔のキノコのように立ちほだかり、悪名高い大日本帝国が焼け落ちていったその日を、戦争を体験した世代は忘れ難く胸に持っているはずです。」と「戦争の記憶」にかかわる文から始まる。
- (25) 六〇年代後半のベトナム反戦運動を扱ったヘイブンスは、一九六五年段階のベトナム反戦運動への共鳴の背景には、米中核戦争に対する危機感もあったと指摘している（ヘイブンス、前掲書、四八頁）。
- (26) ベ平連の組織上の特徴について、一九六八年一月七日に大阪で開催された「再びベトナムを考える」という集会での吉川勇一の発言を紹介しておこう。「その一つ一つが様々な性格を持ちそれぞれの考え方、独自の歩み方をして大きな貢献をしています。それらをいっしょくたにして、いわゆる市民運動はといって片付けられる状況ではないと思います。」（ベトナムに平和を！関西連合『資料集』（吉川資料）三〇―三二頁）。
- (27) 鶴見良行「新しい世界と思想の要請―日米市民会議の意味―」『鶴見良行著作集2 ベ平連』みすず書房、二〇〇二年、三五頁。（初出は『世界』二五二号、一九六六年一〇月）。

- (28) 平井一臣「社会運動・市民・地域社会―『エンタープライズ闘争』前後の佐世保を中心に―」岡本編、前掲書、所収。
- (29) ヘイブンス、前掲書、二二〇頁。
- (30) 「新しい行動と新しい思想と」『ベ平連ニュース』第三四号、一九六八年七月一日、『縮刷版』、一四八頁。
- (31) 後に触れるように、この会議で「変革」が議論されたこと、そしてその内容は、ベ平連運動に大きな影響を与えるが、「変革」の問題、とくに安保の問題が運動課題になるという流れは、この国際会議開催以前から強まっていた。小田らの発言も、そうした状況への対応のなから出てきたものと理解した方がよいだろう。たとえば、京都では五月一三日に「京都安保を考える市民の会」の準備会が開かれたが、塩沢由典は、この会の設立の経緯を次のように述べている。「昨年十二月以来、定例デモの参加者が急激に増え、五月には二百名を越えた。各大学や高校にも新しいまとまりができて活動している。また、二月以来、定例デモのあとに研究会を持つて、自衛隊の実情や公安条例について考えてきた。私はこの時点で、新しい市民運動を提案したい。ベトナム戦争に関連して、日米安保条約の問題に目を向ける人が多いし、私たちの間で考えてみたいという人も出てきている。日本の問題として、私たちの問題として、安保条約にアクセントを置いた市民運動を起そう。」(塩沢由典「京都安保を考える市民の会」『ベトナム通信』第五号、一九六八年六月、『復刻版』、二〇頁)。
- (32) 小田実・鶴見俊輔編『反戦と変革』学芸書房、一九六八年。
- (33) ヘイブンスは、この会議での「社会変革」をめぐる議論について、小田らの主張は「『変革』とは社会構造の基本的変革を意味したのではなく、意見広告、ティーチイン、署名運動、そして六月行動で一つの頂点にまで到達した大集会といった行動とあわせて、一連の戦術形態が京都會議で初めて広く認容され追加されたことだった。」(ヘイブンス、前掲書、二二四頁)と述べ、「ベトナム戦争の終結という中心的課題の追求と同時に、沖縄の解放と安保反対によって、小田の言うところの『人間性の回復』をかちとるということに強調がおかれていた」と評価している(二二二頁)。ただ、この会議での議論の全体的トーンは、ヘイブンスが言うような戦術レベルに止まらない運動課題全体の変化があったのであり、また、小田らの真意が戦術的なレベルのものであったとしても、運動の担い手にとってはベ平連運動の質的な変化をも意味する問題提起と捉えられたのではないか。
- (34) 「『全国懇談会』開かれる―活発な経験交流―」『ベ平連ニュース』第三〇号、一九六八年三月一日、『縮刷版』、一一九頁。
- (35) 「ベ平連第四回懇談会―自己の変革観による安保・沖縄闘争―」『ベ平連ニュース』第四二号、一九六九年三月一日、『縮刷版』、二〇九頁。
- (36) ベトナムに平和を！関西市民連合『ベ平連資料集』(吉川資料)、三〇頁。
- (37) 前掲「ベ平連第四回懇談会」『縮刷版』、二一〇頁。また、この全国懇談会について「仙台ベ平連では、運動の初期には労働者・主婦・学生と一体になっていたが、次第に学生がラディカルになり、かなりの人数を集めていた仙台ベ平連が、現在、崩壊状態

- におちいつていると代表が報告している。それは、どの地域のベ平連にも、程度の差こそあれ見られる傾向である。」（小池はるお「さまざまなベ平連 全国懇談会の報告」『ベトナム通信』第一四号、一九六九年三月、『復刻版』、九〇頁）という報告記事もある。
- (38) 「ざだん会 ベ平連とニュース」『ベ平連ニュース』第四三号、一九六九年四月一日、『縮刷版』、二二二頁。
- (39) 吉川資料。
- (40) 飯沼二郎「再び市民運動について」『ベトナム通信』第六号、一九六八年七月、『復刻版』、二四頁。
- (41) 飯沼「市民運動と市民感覚―市民運動の正しい発展のために―」『ベトナム通信』第一九号、一九六九年八月、『復刻版』、一一〇頁。なお、飯沼の市民運動に関する洞察は、『飯沼二郎著作集』第四卷（市民運動研究）、未来社、一九九四年、に収められている。
- (42) 田中志津代、『ベトナム通信』第六号、一九六八年七月、『復刻版』、二七頁。
- (43) 久野収「ベ平連運動の果した意味」（久野収『市民主義の成立』一九九六年、春秋社、一五二―一五三頁）。
- (44) 「歩くそして考える」長野ベ平連のニュース ベ平連グループ機関紙紹介その1」『ベ平連ニュース』第三八号、一九六八年一月一日、『縮刷版』、一八〇頁。
- (45) 深尾吉心「高槻ベ平連だより」、「広島ベ平連」『ベ平連ニュース』第三二号、一九六八年四月一日、『縮刷版』、一二六、一二七頁。
- (46) 佐世保十九日市民の会編『市民運動の出発』社会新報、一九六九年、一八頁。
- (47) 『ベ平連通信福岡』創刊号（吉川資料）。
- (48) 『ベトナム通信』に掲載されたデモ参加者の次のような意見も、当時のベ平連の「変革」をめぐる問題についての批判的な意見であろう。「一年程前、定例デモに初めて加わった時、反体制も安保も頭の中にはなかった。地理的な空間を越えて自分が直覚し得た限りの、ベトナムの殺戮を否定するために、私は歩き始めたのである。（中略）いつの間にか、安保がベトナムと振り合つて語られるようになった。『安保』という日本人の生傷に触れようとする時、社会人と言われる人々、例えば私達の両親のような、^マに、一種のためらいと語られない部分の存在を感じるのは、私だけだろうか。今こそ本当に生活に密着した運動が必要ではないのか、と思う。もともとの出発点で盛んに行なわれた反戦バッチや反戦バックの運動、あんな形のものが生活に入りこんで果す意味を、もう一度考えてみる必要があるのではないだろうか。私達が各々の場で、それぞれに考えて展開していきけるものが、もっとあるように思う。最近、デモの時に、車道を歩くものと歩道を歩く人々の区別が、はつきりついてしまったのを感じる。これでもいいのだろうか。」（宮崎純子「私はこう思う」『ベトナム通信』第一三三号、一九六九年二月、『復刻版』、八三頁）。
- (49) 鶴見良行は、地域ベ平連の動向について、以下の七つの特徴を指摘している。①地域独自の問題を強力に取り上げるように

なった(千葉ベ平連の三里塚への取り組み)。②自衛隊、米軍基地への取り組み(横須賀、岐阜、高田、米子、の各ベ平連や宇治Mアンポ社)、③各地でのフォークゲリラやミニ・デモなどの新しい運動方法、④高校生の運動の活性化、⑤地域的な連携の試み(全愛知ベ平連連絡会議、全北陸ベ平連連絡会議) 地方の自前の運動の模索、⑥弾圧と地域での救援組織の設立、⑦京都の橋の下大学のような各地の広場の模索。(鶴見「ハンパクの五日間 予言的な『小さな大実験』」前掲『鶴見良行著作集2』、三二四〜三二五頁)。

(50) 小林トミ「十年目の家庭訪問」『ベ平連ニュース』第五七号、一九七〇年六月一日、『縮刷版』、三三三頁。

(51) 『週刊アンポ』第八号、一九七〇年二月。

(52) 「情報」『ベ平連ニュース』第六五号、一九七二年二月一日、『縮刷版』、四〇二頁。

(53) 『ベ平連通信福岡』第一二号(一九六九年九月)(吉川資料)。この文章は『ベ平連ニュース』第四九号(一九六九年一〇月一日)に転載されている(『縮刷版』、二七三頁)。

(54) 「七〇年がやってきた! インタビュー小田実氏に聞く」『ベ平連ニュース』第五二号、一九七〇年一月、『縮刷版』、二九三ページ、「こわいのは目に見えない自警団だろう 小田実氏インタビューその2」『ベ平連ニュース』第五三号、一九七〇年二月一日、『縮刷版』、三〇一頁。

(55) 栗原達夫「沖繩闘争―私の視覚の中で」『ベ平連ニュース』第三六号、一九六八年九月一日、『縮刷版』、一六五頁。

(56) たとえば、一九七〇年三月に沖繩にいった立命館ベ平連のメンバーの一人は「沖繩で闘っている人たちの闘争は、決して本土に見られる如くの宙に浮いた理論闘争(僕にはそう思えてならないのですが)ではなくして、現実の日常性との厳しいせつぱつまった闘争であることを感じました」(『愛のいずみ』立命ベ平連のイタチちゃん「沖繩」と「オキナワ」をもう一度)『ベトナム通信』第三二・三三合併号、一九七〇年九・一〇月、『復刻版』、二六六頁)。

(57) 『週刊アンポ』第八号、一九七〇年二月、一六〜一七頁。

(58) 同右、二二頁。

(59) 同右、二二〜二三頁。

(60) 中川六平「『ほびつと』で見たこと知ったこと考えたこと」『ベトナム通信』第五二号、一九七二年六月、『復刻版』、四七九頁。

(61) 麻生薫「相模原―八月」『ベトナム通信』第五五号、一九七二年九月、『復刻版』、五二六頁。

(62) 思想の科学研究会『会報』第五六号、一九六七年一〇月、一〇頁、『思想の科学 会報』(復刻版)第四卷、柏書房、一九八五年、六六頁。

(63) 関谷滋「日本人問題としての朝鮮人問題」『ベトナム通信』第二四号、一九七〇年一月、『復刻版』、一七四頁。

(64) ベ平連の解散問題に関わる記録として比較的早い段階のものは、一九七一年八月七〜八日に行われた「老人ベ平連の会議」である。この会議のなかで「早晚、ベトナム戦争が何らかの形で終るであろうが、そのとき、ベ平連運動はどうすべきかということからであったように思う。すくなくとも東京と京都のベ平連は、運動の当初から、ベトナム戦争が終ったなら、『即日解散』という約束であったが、その他のベ平連の人たちも、この点については、ほぼ同意見のようであった。そしてまた、たとえ、ベ平連は解散しても、このような運動は、つづけていくべきではないか、ということについても。」（飯沼二郎『ベ平連』的なるものとは何か『ベトナム通信』第四三三号、一九七二年九月、『復刻版』、三九二頁）。「ベ平連ニュース」第七五号（一九七二年一月）に掲載されている小田実のインタビュー記事で、小田は「ベトナム戦争は、いつ終るかしないけれど、戦争は終結の方向にむかうだろう。いつ終ったのかと、むずかしい議論しても、しょうがないのだけれど、解放戦線と、民主共和国が終ったと宣言した時に、それが終ったとして、ベ平連は終るわけだ。」とベ平連運動の終結のタイミングの問題を語り、「今、ベ平連とは別のかたちの運動が必要になってくる時期だと思う。今、だから、ベ平連は、両方なくてはならないのだな。」と述べている。（小田実氏七二年を語る どうにも息ぐるしい『世の中』だけれどぬけぬけとおおらかにやろう『縮刷版』、四八一頁）。つまり、ベ平連運動に終止符を打たねばならずその時期がそう遠くはないという見通しと、ポスト・ヴェトナム後の市民運動の模索の時期であるとの小田の状況認識を指摘することができる。「ベ平連ニュース」第八七号（一九七二年二月）には、「ベ平連解散？それとも」という記事が掲載されている（『縮刷版』、五六三頁）。

(65) 京都ベ平連の飯沼二郎は、『ベトナム通信』第三五号（一九七〇年二月）に「京都ベ平連の解体」という小文を発表している。それによれば、京都市内及びその周辺に市民運動団体が四〇ほど存在し、それぞれが独自の活動を行っている状況があり、「五年半まえに発足した京都ベ平連なる運動体は、今や完全に発展的解消をとおわったのである。もはや『京都ベ平連』なる運動体は、実体としては存在しない。」と述べられている。そして「今後も『京都ベ平連』は、京都地区にあるこれらの運動体の連絡機関として存続させることが望ましい」とし、月一回の定例デモと『ベトナム通信』の発行をおこなうという。（飯沼二郎「京都ベ平連の解体」、『復刻版』、三〇三頁）。

(66) 『ベトナム通信』第五七号（一九七二年一月）には「ベ平連という名称をつかうのもこれが最後かもしれないと思いつながら、十月の共同行動を準備したグループ『十月のベ平連』に参加したひとりとして」（四条さゆり『十月のベ平連』覚え書）という文章が掲載されている（『復刻版』、五五二頁）。また、同号において、編集部は「たしかにベトナムに平和が来たのではないし、ベトナム解放の道はまだまだ遠いのですが、アメリカの、ベトナムへの直接的な介入については、人民の闘いによって阻止され、一応、米帝をベトナムから追い出す見通しがついたと思います」と述べ、次号で『ベ平連』つて何や 公開討論会の特集することを予告している（『復刻版』、五五五頁）。

(67) 『札幌ペ平連ニュース』四八号、吉川資料。

(68) 最後の『ペ平連ニュース』は、一九七四年三月二八日に発行された。

(69) 加茂利男「戦後五〇年・日本政治文化の軌跡」『年報日本現代史』創刊号、東出版、一九九五年、六六頁。

(70) J・ヴィクター・コシュマンは、「ペ平連は、制度的にも、資金においても、イデオロギー的にも、既存の戦後左翼と完全に切れたところで形成され、のちに一九六〇年代や七〇年代に生まれるさまざまな市民運動のモデルになるものだった」(J・ヴィクター・コシュマン「知識人と政治」アンドルー・ゴードン編『歴史としての戦後日本』下巻、みすず書房、二〇〇一年、四二〇頁)と述べているが、本稿での検討から明らかのように、ペ平連運動の中心的な課題である「非戦」「反戦」の問題は、戦後左翼の運動とむしろ共通していると考えた方が妥当であり、戦後の新旧左翼を含めた運動潮流のなかでの過渡的な性格をもった運動と捉えるべきだろう。

(71) 社会運動あるいは平和運動についての「非戦」と「反戦」の問題については、赤澤史朗による以下のような整理に依拠している。

「この『非戦』の立場とは、戦争一般への嫌悪や反発を基礎とした戦後日本の平和主義の一つの流れであろう。侵略戦争への反行動に立ち上がる『反戦』が、なんらかの政治イデオロギーに立脚して不正義の戦争を批判するのに対し、『非戦』は政治イデオロギーとは無縁な地点にあるものであった。従って『反戦』から見ると『非戦』の立場は、しばしば曖昧な『遅れた』意識に過ぎないようにみなされるが、『非戦』は『反戦』とは異なり、究極的にはあらゆる戦争を否定する絶対平和主義に近接する立場を意味した。」(赤澤史朗「『戦争体験』と平和運動―第二次わだつみ会試論―」『年報・日本現代史』第八号、現代史料出版、二〇〇二年、一九頁)。

(72) 小田実は、『ペ平連ニュース』第七五号(一九七二年一月)でのインタビュー記事(「小田実氏七二年を語る」)のなかで、「ぼくらの運動をはじめからみるとくらしの問題に直結していなかったのだ。」と述べ、「あそびの方から始めて、ずーと広がってきた。仕事の問題、くらしの問題まで来ている。これからはいのちの問題までも、くるだろう。いま我々の運動は、どこから出発しても、ずーと広がって、くらし、いのちの問題まで広がってくると思う。」と述べている。(『縮刷版』、四八一頁)

(73) たとえば、能勢ナイキ闘争に取り組んでいた北撮ペ平連の機関紙のなかでの次のような文章が、当時の革新自治体に対する見方の一つを示している。

「或る党派が議会制民主主義を至上のものとして、あらゆる力量をついやしている。そして、革新知事が大阪に生れたことによつてその理論が正しいとして、それこそ踊りしているがこれは大変な思い違いという他はないであろう。例えばナイキの問題にしてもこれで能勢には、できないだろうとか反対運動が容易になるだろうとか言う。そうだろうか？確かに知事は革新という看

板がある以上『ものわりのよい姿勢』をとるだろう。そして大阪には当分—少くとも四年間—はナイキの基地は大阪にはもってこれないだろう。ただそれだけのことである。一方、住民の意識はどうだろうか。それこそ上が変わっただけで意識はほとんど変わらないであろう。お上がゲタをあずけてしまう姿勢が生れるだけである。それこそ基地ができたできなかったということよりも退歩であろう。」（北攝ベ平連ニュース、第二五号、一九七一年四月、吉川資料）。

(74) この点については、京都ベ平連の飯沼二郎が、京都でのベ平連運動八年間を総括した次の文章が示唆的である。「私は、もちろん、ベ平連から前衛党に行く人を妨げようなどとは、毛頭おもわない。しかし、ベ平連もまた、前衛党とはちがった、独自の役割をもつものとおもっている。私は、ベ平連ないし市民運動のみで、日本の社会がよくなるとはおもわないが、同時にまた、それを抜きにしては、決して日本の社会はよくはならないと思っている。市民運動と前衛党とは、いわば車の両輪なのである。どちらが尊く、どちらが卑しいということはない。」（飯沼二郎「体験的『市民運動』論—八年間の総括—」『ベトナム通信』第六一号、一九七三年三月、『復刻版』、五九五頁）。

(75) ベ平連運動が展開した個人原理に立脚する社会運動のあり方は、今日の市民運動の多くに影響を与えている。たとえば、イラク攻撃に反対する反戦平和運動が世界的にまきおこるなかで、日本の新しい反戦平和運動として注目を浴びたCHANCEI（平和を作る人々のネットワーク）の中心人物の一人小林一朗は、被災地図プロジェクトの山本唯人との対談で次のように語っている。

「山本『対等な関係』をベースにおいて運動を組み立て直していくというテーマ自体は、例えば六〇年代後半からのベ平連とか、運動史のなかですつと問われてきた問題ですよ。CHANCEIはこうしても『見かけ』や『スタイル』の新しさに引きずられて語られがちだけど、そういう意味では、運動史の古典的テーマを今の文化状況のなかで試しているともいえる。」

小林 その通りで、よく『新しい』と言われたけれど、いまの時代に起っているから、新しいのは当たり前の話。基本的な考え方は『ベ平連』と同じだけど、練り込み方は、まだあそこまで達していない。ぼくらは気軽にやり過ぎていた。（小林一朗・山本唯人「広がる『非戦』—新時代の反戦運動とは?—」『世界』第七一五号（緊急増刊）立ち上がった世界市民の記録」、岩波書店、二〇〇三年六月）。

さらに、二〇〇四年四月一日に、地球平和公共ネットワークを中心に、平和運動についての世代間対話の場をつくる試みとして公開討論会「デモカパレードかピースウォークか—世代間対話の試み」が東京で開催されている。吉川勇一、小林一朗のほか、天野恵一（『インパクション』編集委員）、小林正弥（地球公共平和ネットワーク発起人）の四名がシンポジストとなっており、その概要は、『世界』別冊、第七三二号（「もしも憲法九条が変えられてしまったら」）、岩波書店、二〇〇四年一〇月、に収録されている。